

重症頭部外傷患者の慢性期における機能改善－新しい評価表による治療効果の検討－  
Functional improvement of the patients in the chronic stage for severe head injury

小瀧 勝、内野 福生、岡 信男、河野 守正  
自動車事故対策機構 千葉療護センター脳神経外科

Masaru Odaki, Yoshio Uchino, Nobuo Oka, Morimasa Kono  
Department of Neurosurgery, Chiba Ryougo Center

【目的】受傷から数年以上経過した重症頭部外傷患者の慢性期における機能の改善について検討した。【対象】1997年10月から2005年2月までに入院した、交通事故により頭部外傷を受けた重度の後遺障害者55例を対象とした。男性42例、女性13例で、受傷時の年齢は $22.9 \pm 7.1$ 歳、入院までの期間は $3.0 \pm 1.5$ 年であった。18名が入院中であり、37名が退院し、その在院期間は $3.2 \pm 1.5$ 年であった。慢性期の重症頭部外傷患者の機能改善について新しく考案した評価スケールを用いて経時的に評価した。判定項目は、覚醒レベル、運動機能、言語理解、言語表出、視覚による認知、聴覚による認知、摂食機能、表情の変化、排泄、寝返り、移動の11項目について評価し、最低が0点で最高が100点である。【結果】レベル判定表で10点以上のスコアの改善がみられたのは55例中28例(51%)で、入院後2年以内にスコアの改善がみられた。入院時のスコアは5点から88点であり、入院時20点未満の群では23例中6例(26%)であった。一方、20点から39点の群では14例中10例(71%)であった。40点から59点の群では8例中7例(88%)であった。60点以上の群では10例中5例(50%)であった。死亡した3例を除いた34例のうち自宅退院が17例(50%)、施設・病院が17例(50%)であった。【まとめ】慢性期の重症頭部外傷患者に対して適切な治療を行うことにより、55例中28例(51%)において何らかの機能の改善を認めた。全身状態の評価とともに、抗てんかん薬の再検討、水頭症に対するシャント設定・圧調節が重要な要因であった。